

研究課題名

精神障害者運動の現代史——抑圧からの抵抗実践による問い直し

背景・問題意識



精神障害者は、判断能力がないかのように扱われてきた

これまで精神障害者による運動が、専ら社会福祉学の領域で被援助者という位置づけで研究されてきた。従来の研究では、精神障害者運動の歴史を福祉の利用者という一面的な姿でしか捉えておらず、自律的に抑圧へ抵抗する社会運動としての精神障害者運動には目が向けられてこなかった。このように、従来の精神障害者の運動の歴史は、福祉を利用する以外の側面を多角的に捉えられていない点で不足がある。そのことが、現在の判断能力の備わっていない精神障害者像を規定する要因のひとつとなっている。

解決方策



社会福祉学の学範と異なる見方を示す必要がある

その抑圧に対して精神障害者の運動が、いかにして抵抗実践を行ってきたのか、その生存の技法について現代史を明らかにしないまま進められている。したがって、判断能力の備わっていない精神障害者像を払拭するには、これまで社会福祉学が目を向けてこなかった社会運動としての精神障害者運動についての現代史から精神障害者の生存の技法を明らかにすることが解決方策として必須である。

目的と方法



**目的** 現在の判断能力の備わっていない精神障害者像や福祉職の周辺でしか生きられない精神障害者像を払拭すること

**方法** 社会福祉の歴史の検討方法と異なる精神障害者運動の現代史を示すこと。

研究の内容

**【A】社会福祉学の分類に捉われない精神障害者運動の現代史の記述をする。**

調査：北海道、東京、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡のローカルな団体を対象に調査。

分析：団体の形成に必要な要素を分析。

結果：精神障害者運動の3つの全国組織の系譜をまとめる。

追加：また、3つの全国組織をめぐって精神障害者運動同士がコンフリクトを生成していく過程についても検証、考察する。

**【B】その時代の社会事象に対する精神障害者運動の立場の形成と他の勢力がどのように影響していたかを記述する。**

調査：精神科医の団体である日本精神神経学会、法律家の団体である日本弁護士連合会、精神障害者の家族の団体である全国精神障害者家族会連合会、福祉職の団体である日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会、身体障害者の団体である全国障害者解放運動連絡会議の5団体を対象に調査。

分析：それぞれの団体の思惑を分析

結果：団体同士の影響関係から精神障害者運動の立ち位置を相対化して、明らかにする。

精神障害者運動の現代史の完成